

渋沢栄一と新潟市域

Eiichi Shibusawa and Niigata City Area

松本和明*

【要約】

渋沢栄一は、日本の近代化・工業化を推進するにあたり、東京ばかりでなく全国の地方ないし地域レベルでの産業・企業の勃興と成長およびその集積が必要かつ不可欠であると強く認識かつ重視して、その実現のために尽力した。渋沢は、地域での銀行をはじめ近代工業やインフラの創設のために、各地に存在する人材や資金をはじめとする経営資源に加えて、東京をはじめとする都市の諸資源も結集させて事業を構想そして推進したのである。

新潟市域においては、1873年に第四国立銀行が創設された後に、発起人の本間新作および鈴木長蔵が、渋沢がかつて在籍して経済・金融の諸システムを確立した大蔵省で複式簿記を学び、その後両者との関係が深まっていった。渋沢と同行関係者および大倉喜八郎等が連携して立ち上げた北越商会は近代倉庫業の草分けとなり、北越鉄道の経営および新潟への延伸も両者の関係が奏功した。経済のみならず教育の振興にも渋沢は貢献している。

キーワード：渋沢栄一、新潟市域、第四国立銀行、北越商会、本間新作および鈴木長蔵

はじめに

渋沢栄一は、「日本資本主義の父」と称されるように、明治時代以降の日本の近代化ないし工業化を主導した企業家・実業界のリーダーとして、また社会事業家としても名高い。

渋沢は、日本の近代化ないし工業化を推進するにあたり、首都の東京ばかりでなく全国の地方ないし地域レベルでの産業・企業の勃興と成長およびその集積が必要かつ不可欠であると強く認識し、その実現のために尽力した。渋沢は、地方での銀行をはじめ近代工業やインフラ企業およびエネルギー企業の創設のために、各地に存在する人材や資金をはじめとする経営資源に加えて、東京等の都市の諸資源も結集させて事業を構想そして推進した。また、各地での起業ないし創業の計画に対して諸側面から指導・支援を惜しかなかったのである。

特筆に値するのは、渋沢が新潟県をたいへん重視したことである。後述するように渋沢は生涯で5回新潟県を訪れるなど地域関係者との交流を深め、諸事業を展開していった。

筆者は、2015年1月に発行された『渋沢研究』（渋沢研究会編集・渋沢史料館発行）第27号に「渋沢栄一と地域経済界の形成－新潟県長岡地域の事例－」を發表し、渋沢との長期的かつ緊密な関係をベースに長岡地域の産業発展と経済界の生成を旺盛に主導した岸宇吉の企業者活動と事績、さらに経営ないし事業姿勢を立ち入って考究することができた。

* MATSUMOTO, Kazuaki [元国際学部非常勤講師・京都産業大学教授]

本稿では、この成果をふまえて、新潟市域の産業・金融の近代化における渋沢と地域の企業家等との関係を第四国立銀行（現・第四銀行）の動向を中軸として検討していきたい。

本稿における史実は、基本的には、渋沢青淵記念財団竜門社（現・公益財団法人渋沢栄一記念財団）が編纂、渋沢栄一伝記資料刊行会が1955年から65年にかけて刊行した『渋沢栄一伝記資料』に拠っている（以下では煩雑さを避けるため、『伝記資料』と略述する）。

I 第四国立銀行の設立・展開と渋沢および第一国立銀行

第四国立銀行および新潟銀行（1896年に普通銀行へ転換し改称）に関わる史実は、特に断らないかぎり、第四銀行により1956年に刊行された『第四銀行八十年史』、74年に刊行された『第四銀行百年史』、また、新潟の企業家の経歴・事績については新潟商工会議所により1958年に刊行された『新潟商工会議所六十周年史』（小林力三編纂）に依拠している¹。

1872（明治5）年11月に渋沢が主導して国立銀行条例が制定されたことはよく知られている。その後、渋沢は、近代的な金融システムと株式会社組織を普及させるために、全国に銀行の創設を促した。これにいち早く呼応したのが新潟であったのは特筆すべきである。

同条例制定直後から、同年6月に新潟県令に就任した楠木正隆は、新潟町およびその周辺地域の有力者ないし名望家に対して、地域の殖産興業を進展させるために、銀行の有用性と早期創設の必要性を強力に訴えた。これにおいて、楠木が、明治新政府の方針に基づいて地域への資金供給や為替・官金取り扱いおよび官米の売買等をおこなうために1869年に立ち上げられた新潟為替会社が放漫経営により短期間で解散を余儀なくされたことに危機感を抱き、堅実な金融機関の創設を強く志向したとの側面にも留意されたい。

これを受けて、蒲原郡域を代表する地主である市島徳次郎（水原町）・白勢長衛（金子新田）・田巻三郎兵衛（田上村）・田巻丈七郎（田上村）・佐藤伊左衛門（下条村・市島徳次郎の実弟）・小林美登里（俵柳村）・本間新作（下新村）、加えて、新潟（港）における代表的な商人の鈴木長八・村田吉蔵・桜井勘蔵・高橋栄蔵・田辺忠蔵の合計12名が設立発起人となり、新潟県、特に参事の松平正直の協力を得つつ、創設計画の策定と準備を進めた。

1873（明治6）年2月に大蔵省（現・財務省）へ設立願を提出し、同年5月31日には認可を受けた。その際に「第四国立銀行」と称することが指示された。出願は第一、第二国立銀行（横浜）に次ぐ3番目であったが、同年4月に第三国立銀行（大阪）が出願し同月末に認可を受けたため、国内で4行目に認可された銀行となったのである。

当初の計画では資本金を30万円と設定して同年7月15日から株式の募集をおこなったものの、出資に対する理解がなかなか広がらなかったため、20万円に変更している。

1873年11月2日に第四国立銀行創立総会が開催された。初代頭取に市島および白勢長衛、副頭取に西脇清一郎（当時の魚沼郡小千谷町・縮および絹織物買継商）、取締役田巻三郎兵衛および佐藤・鈴木・村田・本間、支配人には白勢彦次郎（金子新田）が決まった。白勢彦次郎は本家である長衛家から分家しており、第四銀行第3代頭取を務めた春三の実父である。

2,000株に対しての株主数は353名となった。筆頭株主は市島と白勢長衛が各65株、次いで西脇および田巻三郎兵衛と丈七郎・佐藤伊左衛門・白勢成熙（新発田町・白勢家宗家）・二宮孝順（蓮

¹ 同行をテーマとする先行研究としては、守田志郎『地主経済と地方資本』御茶の水書房、1963年3月、暉峻衆三「第四国立銀行」（加藤俊彦・大内力編著『国立銀行の研究』東京大学出版会、1963年7月、所収）があげられる。

潟興野)・大橋小平(三島郡与板町)が各 50 株であった。鈴木・村田・本間は各 30 株の所有であった。

その後、大蔵省から、国立銀行条例は 1 名の頭取を置くことを定めており、2 名は不適当との指摘を受けた。このため、頭取は市島のみとし、取締役は田巻三郎兵衛・鈴木・本間とした。

1873 年 12 月 24 日に開業免許が下付され、翌 74 年 3 月 1 日に営業を開始した。本店は新潟県東堀前通七番町に設置した(現在の第四銀行本店所在地)。開業は、第一国立銀行、第五国立銀行(大阪)に次いで国内 3 行目であった。

開業時の職務分担は、副頭取の西脇が為換(替)掛、取締役の田巻が検査役兼公務掛当分貸付掛専務、鈴木が出納掛兼為換(替)掛、本間が検査役兼公務掛記録方、支配人の白勢が貸付掛兼記録方を兼務した。副支配人(計算掛兼公務掛記録方)に鈴木長蔵、勘定方(出納掛兼貸付掛)に斎藤喜十郎、帳面方(貸付掛兼公務掛賄方)に今井弘三郎、書記役に石田祿郎、手代に八木市平と川上林三、東京支店詰(詳細は後述)に辻金五郎が任ぜられている。

斎藤喜十郎(「山三」)は、新潟で清酒問屋(「三国屋」)や回漕業を営み、後に越佐汽船(現在の佐渡汽船のルーツ)社長をはじめ新潟商業銀行専務取締役、新潟硫酸(現在のコープケミカルのルーツ)や新潟電灯・新潟倉庫の取締役、新潟商業会議所特別議員などを歴任し、鍵富三作(「鍵三」)や田代三作(「田三」)とともに「新潟三大財閥」と称された。辻は、新発田藩の藩米の保管および売り捌きの実務を担っていた。

通常の業務は、創立総会で決定された申合規則(23カ条)および同増補(34カ条)に基づいて展開された。それぞれは、渋沢が 73 年 6 月に総監役に就いた第一国立銀行のそれとほぼ同様である。同行のものを参照して作成されたとみてよい。

申合規則には、「当銀行ノ諸役人等ハ職務ヲ廉直ニ務ムルコト」(第十条)、「申合規則ノ条款、各相恪守シテ取テ違犯アルヘカラス」(第二十三条)と職務精励と法令遵守が明記されている。また、以下の同増補の主たる条文にもあるように、社内外での信頼関係を重視し、高い倫理感および誠実かつ衆議をもって業務にあたることが明示されているが、渋沢の事業姿勢が色濃く反映されたものといえる²。

【史料 I - i】

(前略)

第二条

当銀行ノ役員ハ常ニ此銀行業体ノ昌盛ナランコトヲ企望シ、夙夜ニ其得失ヲ思量シテ殖益ヲ謀ルヘシ、陽ニ銀行ノ為筋ヲ論シテ陰ニ自己ノ営利ヲ要シ、又ハ自己ノ便宜ニ因テ銀行ノ事務ヲ取捨スル等ノ事アルヘカラス、若シ此等ノ所為アルニ於テハ、誰彼ヲ論セス嚴肅ニ之ヲ罰スヘシ

(中略)

第九条

方今創業ノ際ハ殊ニ百事ノ相協同スルヲ緊要トシ、其処分ニ於テモ最モ慎重丁寧ナルヲ要スルニ付、頭取取締役等ハ別シテ茲ニ注慮シ、自然他方ノ引合先ニ於テ 官府又ハ商会商人等ヲ論セス イカナル事ヲ申談スルトモ、衆議既定ノ事務ノ外、新ニ銀行ノ業ニ関スル事ハ、一己ノ考按ヲ以テ取極ムヘカラス

² 新潟市史編さん近代史部会編『新潟市史 資料編 5 近代 I』新潟市、1990 年、365～373 頁。

(中略)

第十四条

銀行諸役員ノ内、非分ノ財ヲ散スル者アレハ、速ニ其職ヲ放免スヘキコト、既ニ銀行成規ニ揭示セラル、所ナレハ、贅言ヲ埃ストイヘトモ、起業ノ際最モ忽ニスヘカラス、仮令其財ノ由来スル処明瞭ナルモ、社中ノ嫌疑ヲ生シ、営業確實ノ信任ヲ失フノ巨害ヲ醸成スルニ至ルヘシ、各茲ニ注意シテ誰彼ヲ論セス、聊モ忌憚ナク速ニ之ヲ処分スヘシ

第十五条

頭取取締役支配人其他ノ役人トモ、銀行ニ於テ人ニ接スルニ、決シテ威権ケ間敷挙動ヲ為スヘカラス、又ハ一己ノ便宜ニヨリテ人ヲ拘留セシムル等ノコトアルヘカラス、諸事懇切ニ取扱ヒ、遅滞ナク弁用センコトヲ要スヘシ

(後略)

ここで注目すべきは、本間および鈴木長蔵が大蔵省紙幣寮で簿記の伝習を受けたことである。

本間は1845(弘化2)年10月1日に新潟町の堀治右衛門の三男として生まれ、下新村(現・新潟市秋葉区新関)の地主である本間徳左衛門の養子となった³。

廃藩置県後に、越後府御用掛、下新村外三十二ヶ村戸長、第二大区小四区長、中蒲原郡町村連合会長、中蒲原郡会議長などを歴任した。また、政治団体としての同好会(立憲改進黨系)や越佐議政会などに関与した。

1874年に米の売買をおこなう新潟米商會所を鍵富三作(初代)等とともに立ち上げ(後に新潟米穀取引所に改組して理事長に就任)、日本石油(現・JXTGエネルギー)・新潟鉄工所・北越鉄道(現在のJR信越本線のルーツ)・北越水力電気(現・北越メタル)・新潟県農工銀行等の取締役を務めた。渋沢や山口権三郎、内藤久寛と緊密な関係を有した。

他方、新潟県会議員(1879～80年)や新関村長(1902～10年)、中蒲原教育会長等も歴任している。

鈴木長蔵は、1846(弘化3)年3月に新潟町で生まれた⁴。鈴木家は代々「小川屋」と称して回船業を営んでいた。

明治維新後は、開港用掛や年寄格、検断、新潟町私立病院取締役、第一大区小三区・四区戸長などを歴任した。

1877年に新潟新聞(現在の新潟日報社のルーツ)を本間等と創刊し、87年には有明新聞(翌年に東北日報)を立ち上げている。

政党への関与としては、1892年に国権党の結成に参画し、その後は進歩党・憲政本党派に属した。

北越興商會初代幹事長(1881年創設、新潟商業学校の設置母体)や新潟商業會議所初代会頭(1896～1905年)、新潟県農工銀行初代頭取(1899年設立)などを務めた。

新潟県会議長・副議長(初代)・議員(1879～82、88～90、93～1902年)、新潟市会初代議長、さらに新潟市長(第2代、1891～99年)や衆議院議員等を歴任している。

本間と鈴木長蔵は、県内の金融界・産業界に加えて、地方政界や行政でも重きをなしたのである。

³ 本間の事績については、新潟県議会史編さん委員会編『新潟県議会史 明治編一』新潟県議会、2001年、1804～1805頁に拠った。

⁴ 鈴木長蔵の事績については、同上書、1759～1760頁に拠っている。

本間と鈴木長蔵は在京（準備）委員に任ぜられて、1873年10月25日に上京し、前述の辻金五郎邸に滞在して、紙幣寮八等出仕の宇佐川秀次郎および丹吉人や権中属の進野簡などから指導を受けた。その際、同年12月に大蔵省が刊行した『銀行簿記精法』がテキストとして使用されていたとみられる⁵。その指導は翌74年2月14日まで約4ヵ月にわたった。

ところで、近代複式簿記の国内への導入を主導したのは、他ならぬ渋沢であった。渋沢は近代簿記の有用性と必要性を早くから認識しており、イギリス人の銀行家であったアラン・シャンドを大蔵省紙幣頭附属書記官に起用し、その普及にあたらせた。シャンドは銀行実務および検査体制の確立にも注力した。他方、渋沢は、全国の国立銀行創設関係者に対して、紙幣寮および第一国立銀行で簿記をはじめ銀行実務の指導を懇切丁寧におこない、また、専門人材の各行への派遣にも尽瘁している。

シャンドの指導の下で簿記の翻訳および解説に尽力したのが、長岡地域出身の小林雄七郎（「米百俵」の故事で名高い虎三郎の実弟）と梅浦精一（東京石川島造船所社長や北越石油会長等を歴任）および外山脩造（阪神電気鉄道初代社長や大阪麦酒監査役等を歴任）であったことを付記しておきたい。

本間と鈴木長蔵は、簿記や銀行実務の研修に加えて、紙幣寮や第一国立銀行等との折衝あるいは調整も担っていた。この間には、東京への支店開設が大きな課題として浮上した。当時の国立銀行条例第16条には、東京、西京（京都）、大阪および開港地（横浜・神戸・長崎・新潟・函館）で創立する国立銀行は、紙幣頭の許可を得て、東京および大阪に支店を設置して各行が発行する紙幣の引き換えをおこなえることが規定されており、明治政府が東京支店を開設するか否か（否の場合は第一国立銀行へ引き換えを依頼）を訊ねてきた。

これに対して、本間と鈴木長蔵は、経費面などを慎重に検討した結果、その有益性から支店設置を決めた。詳細は不明であるが、頭取以下のトップマネジメントも追認したようである。1874年1月15日に認可を受け、辻金五郎邸（東京第五大区四小区神田和泉橋通佐久間町一丁目）の一部を借用して、同年3月1日に本店と同時に東京支店を開設して営業を開始した。当初は白勢彦次郎が東京支店支配人（現在の「支店長」に相当）を兼任していたが、同年5月22日に辻が就任した。東京支店の主たる業務は紙幣の兌換、民間為替の取り組み、為替により送納される新潟県の租税（「貢金」）の取り扱いで、貸付金原資として5万円（後に7万円）を設定するなど、本店と肩を並べる重要な拠点となっていた。

1874年11月には、紙幣寮から、シャンドが第四国立銀行本店を訪問し、簿記の運用状況を視察するとともに業務の諸側面について検査および指導をおこなうことが通知された。シャンドは翌75年1月から全国の国立銀行を巡り始めており、同年に第四国立銀行を訪れたと思量される。

1875年2月に紙幣寮内に銀行学局が設置されると、第四国立銀行は従業員を継続的に派遣して、スキルアップを図った。

時期は下るが、大蔵省銀行課に異動して（四等属）、銀行検査官を務めていた外山脩造が、1878（明治11）年4月に、前野真太郎（八等属）とともに、新潟港や新潟県内の経済・産業の状況およ

⁵ 『銀行簿記精法』の内容の第四国立銀行への移転に関しては、久野秀男氏が詳細に分析している（『銀行簿記精法』と第四国立銀行『資料』との比較吟味－第1次中間報告－ 学習院大学経済学会『学習院大学経済論集』第6巻第1号、1969年6月）。久野氏は、『銀行簿記精法』で取り上げられている内容が第四国立銀行にほぼ正確に伝わっていることを高く評価している。本間と鈴木長蔵の能力および意識の高さによるものといえよう。

び第四国立銀行の経営動向、長野県内の経済・産業の状況および第二十四国立銀行（飯山）・第十九国立銀行（上田）・第十四国立銀行（松本）の経営動向の実地調査をおこなった記録が残っている。同月6日から8日に第四国立銀行の検査をおこなっている⁶。その結果は、同年6月29日に同省が発行した『銀行雑誌』第7号に掲載された。

外山の検査姿勢は厳密ないし厳格そのものであり、受検者側の渋沢が一目置くほどであった。これが両者を結び付ける大きなきっかけとなったのである⁷。ともあれ、上述の外山による第四国立銀行の検査報告の主要部分を次に示すが⁸、非常に緻密なものであった。

【史料Ⅰ－ⅱ】

（前略）

一 該店ノ営業ハ人民ノ貸付ト県庁ノ為替ヲ勤ムルヲ以テ専ラトナス、故ニ為替ノ金額ハ官ニ属スルモノ多クシテ人民ニ属スルモノ少シ、而シテ其口数ハ之ニ反ス今其人民ニ属スル東京為替ノ金額ヲ平均スルニ一口百六円余ニ過キス、蓋シ新聞社へ送り金ノ類多クシテ、該地商人等ノ仕入金ニ係ルモノ少ナキカ故ナルヘシ

（中略）

一 貸付金ハ通計百十四口其金高貳拾五万四千四百余円ナリ、平均一口ニ付凡ソ貳千二百三拾円ニ当ル、抵当ハ米穀地所家屋最モ多シ公債証書株券等之ニ次ク信用貸ハ六口ニシテ其金高壹万六千六百余円ナリ、又米穀ハ大概沼垂貸庫及鈴木長八貸庫ノ預券ナリ、其他米売預証書或ハ借用人自身ノ米預証書ヲ抵当トセンモノアリ、地所家屋ノ抵当ハ大抵旧貸付ニシテ、近頃ハ斯ノ如キ抵当ヲ以テ貸付ヲナススト云

（中略）

一 定期預金ハ通計二十四口其金高九万四千六百余円ナリ、内県庁並ニ管内計算掛病院ノ分八万貳千貳百余円、米商会所ノ分壹万余円、残り貳千四百余円ハ官員二口土族一口僧侶二口農商四口外国人一口都合十口ナリ

一 当座預金ハ官ノ分ヲ除キ通計十口其金高貳万七千三百余円ナリ、内管内計算掛町会所ノ分壹万八千余円、米商会所ノ分八千九百円、残り四百余円ハ土族一口官員二口ノ分ナリ

一 当座預金貸越シハナシ、又貸越シノ約ヲ結ヒタルモノナシ

（中略）

一 振出し手形ハ官ノ分ヲ除キ過半米商会所ト該地商人鈴木長八ノ分ナリ

（中略）

一 該店ノ諸帳簿ハ能ク整頓セリ

一 該店ハ旧町会所ニシテ其建築ハ通常商家ノ如クナラス稍官庁ノ体裁ニ近シ、又目今石門鉄柵ノ建築ヲ企テ専ラ築造中ナリ、金庫ハ頗ル堅固ニシテ一兩年前ノ建築ニ係ル、其外抵当物ヲ入レ置ク土蔵一棟アリ

（後略）

⁶ 新潟県下新潟町 第四国立銀行「第九回半季實際考察課状」（日本銀行調査局編『日本金融史資料 明治大正編 第三卷』大蔵省印刷局、1957年、299頁）。

⁷ 渋沢と外山との緊密かつ長期的な関係については、拙稿「渋沢栄一と外山脩造」（渋沢研究会『渋沢研究』第24号、2012年1月）を参照されたい。

⁸ 検査官四等属外山脩造・同八等属前野眞太郎「銀行検査官報告書撮要」（同編『日本金融史資料 明治大正編 第六卷』1957年、57～60頁）。

洪沢は、銀行（家）の社会的地位の向上に向けて、国立、私立を問わず結集して商議について議論するとともに相互の交流を深めるべく、旧知である第二国立銀行頭取の原善三郎や第三国立銀行頭取の安田善次郎および三井銀行支配人の三井三郎助と三野村利助に団体の立ち上げを呼びかけた。彼らの賛同を得て、1877年7月2日に第1回の会合が開催された。洪沢が論語の一節である「択テ善ニ従フ」から「択善会」と名付けた⁹。

この会合には、辻金五郎が参加している。

メンバーは上記の各行と第五・六・十五・二十国立銀行および傍聴銀行として第八・十六国立銀行が加わり、合計11行となった。

月1回の会合には辻（80年3月まで、その後横浜正金銀行支配人に就任）および原田銀造（80年3月から東京支店支配人事務代行）が継続的に参加した。洪沢および第一国立銀行とはもとより、当時の「都市銀行」とのネットワークが構築さらに深化するところとなり、創業期の第四国立銀行においては有益であったといえる。

原田は西脇家の関係者（代理人）で、1877年1月に西脇清一郎の後任として副頭取に就き、78年2月に退任した後、81年3月まで取締役を務めている。

択善会は1880年8月の第33回会合をもって解散され、改めて洪沢を委員長として東京銀行集会所が創設された（現在の東京銀行協会のルーツ）。

立ち入って注目すべきは、創設期およびそれ以降の第四国立銀行ないし新潟銀行には、直接、間接を含めて、洪沢の影響を受けた人物が複数存在していることである。このうち、八木朋直と鍵富徳次郎について取り上げたい。

創設期の第四国立銀行の業績は紙幣価値の下落による兌換準備金の減少などのために芳しくなく、役員の間での辞任が続くなど、経営が混乱していた。こうしたなかで、新潟県会計課長（大属）を務めていた八木朋直が、主要株主や県令の永山盛輝などの勧めを受けて、1876（明治9）年10月に第2代頭取に就任した。後に八木は「第一銀行の洪沢に倣ひて」¹⁰ 転身を求められたと述懐している。

八木は、1842（天保13）年4月に米沢藩士族の金子文弥の次男として生まれ、縁あって八木丈七家の養子となった。戊辰戦争に従軍した後、1872年に水原町（現・阿賀野市）に設置された越後府に出仕した。越後府が水原県そして新潟県となるに伴い累進し、会計ないし出納の責任者となった。

八木は「銀行ノ確実ナルト否トハ割賦金ノ多少ニアラズシテ、積立金ノ多少ニ在ルヤ亦疑ヲ容ルベカラズ」¹¹ と堅実経営を志向するとともに、預金および新潟米商会所との関係強化をはじめとする融資の拡大、県との連携強化に旺盛にリーダーシップを発揮した結果、経営再建を果たし、事業基盤がより強固なものとなった。八木は1896（明治29）年12月まで20年間にわたり頭取を務め、同年の普通銀行への転換および新潟銀行への改称をなし遂げた（その後99年7月まで会長）。八木を副支配人として支えたのが鈴木長蔵である。

八木は、新潟県農工銀行監査役や新潟商業銀行（1897年設立、1943年に第四銀行と合併）専

⁹ 択善会については、安彦正一「銀行業と財界の形成－択善会を中心にして」（洪沢研究会編『新時代の創造 公益の追求者・洪沢栄一』山川出版社、1999年、所収）が詳細である。

¹⁰ 「第四国立銀行の公金取扱に付いての回想」（前掲『新潟市史 資料編5 近代I』360頁）。

¹¹ 『第四銀行百年史』135頁。

務取締役および新潟市長（第4代、1899～1902年）や新潟県会議員（1892～97年）、新潟市会議長・議員（名誉職参事会員）、新潟商業会議所特別議員などを歴任した。1886（明治19）年11月に完成した萬代橋（初代）の建設資金に私費を投じたことでも知られる。

鍵富徳次郎は1859（安政6）年7月1日に生まれ、三作（初代）の養子となった¹²。1873年から77年にかけてアメリカに留学し、帰国後は三井物産を創始した益田孝の秘書を務めた。この間に渋沢の薫陶を受けたとされる¹³。1886年に第四国立銀行に入り、東京支店の敷地買収（91年に南茅場町へ移転）や普通銀行への転換業務などに携わり96年に退職した。1900年2月に新潟銀行支配人に就任し、03年1月には取締役役に選任された。

この他、新潟株式取引所専務理事をはじめ、新潟倉庫社長、新潟貯蓄銀行（1895年設立、1944年に第四銀行に合併）や宝田石油（現在のJXTGエネルギーのルーツ）監査役・取締役、鍵三合資会社・銀行理事、新潟商業会議所常議員、新潟県会議員や新潟市会議員などを歴任した。

八木および鍵富徳次郎は、渋沢と同様に、地域ないし社会に対する高い責任感に立脚して、誠実かつ積極的に銀行業をはじめとする諸事業を推進していったのである。

1907（明治40）年に創立35周年を迎えるにあたり、『新潟新聞』紙上に「新潟銀行創立談（本間新作氏談片）」と題して、本間の懐古談が連載された。この時点において設立発起人で唯一生存していたのが本間であった。以下に主な箇所を引用するが、設立時の県との関係や株式募集の苦勞、八木朋直の関与などが率直に語られており、たいへん興味深い。銀行という全く新しい組織が地域でいかに受容されたのかが読み取ることができる¹⁴。

【史料Ⅰ－iii】

（前略）実際を申せば当時の発起人は、自動的に銀行を計画したので無く全く官庁から半ば命令的に強られて、中にはシブ～発起者中に加はつたものもあるやうな次第。イヤ其実は斯様に御話する私からして当時は幾分か不安心の気味もあつて、左のみ乗気にもなりませんでしたが、初期の時代は万事がコンナ物か知らんと、今でも当時を回想して一人で微笑むこともあります。（後略）

< 1907年5月12日掲載 >

（前略）一般に銀行の何ものたるか、分らない。中に応募するものも県庁あたりから勧誘されると恰も、御用金を納めるやうな考へで、漸く納得するといふ有様ですから、私共も発起人として株の募集には一方ならぬ困難を致しました。何でも其頃はイクラ勤めても不承知で、コチラから態々運動して株主を募るのですが、ソレが為には幾回となく新潟へ出かけて先づ銀行といふもの、効能を説き廻つたものでした。今度政府が条例を出して新に銀行といふ金融の機関を作つて下さるに就ては、何卒安心して預け入れを願ひたい。銀行といふ所は實際人民の便利の為に拵へたもので、個人同士の金銭貸借には随分危険を伴ふけれど、予じめ銀行に預けて置いて、必要な場合に引出して融通をすれば危険の無い上に手数もかゝらず、其上坐らにして漸次と利が殖ねて行くのだから、此程結構なことは無いと、口を酸くして遊説……といふよりも寧ろ哀願を試みましたが尚ほ県庁では令達を出して勧誘する。それでも折角応募した株主が、

¹² 前掲『新潟県議会史 明治編一』1728頁。

¹³ 『第四銀行百年史』185頁。

¹⁴ 本稿で活用する『新潟新聞』は、新潟県立図書館が所蔵するマイクロフィルム版による。

買人さへあり次第に急いで株を売つて了つて、コレで漸く安心したといふやうな顔付をして、一日も早く株から関係を絶つことばかり考へて居た実況ですから、予定の二十万円に達する迄には非常の困苦を経たのですが、其時分の知事（ママ）楠木正隆参事松平正直の御二人が、熱心に此事業を奨励せられ、殊に松平さんなどは先づ自分から模範を示すといふ主意で進んで六十株を引受けた処当時県民の間には官吏が銀行株に加入するなど、いふは、甚だ不都合の沙汰だと言つて、大分に攻撃も聞へました。令様な有様で幾回となく勧誘した上漸く加入するものばかりであつた中に自分で申し込んだ人が一人あります。ソレは改進黨の名士として御案内の故沼間守一氏で御座りました。（後略）

< 1907年5月13日掲載 >

（前略）本県会計課長の八木朋直氏が自分で銀行を引受けやうとの希望もあつたやうな様子で、進んで此の募集に応ぜられた上に私共の勧誘に応じ、遂に課長の位置を去りて新たに銀行を経営せられるに至つたのです。尤も其頃は県庁の会計課長など、申せば民間から非常の尊敬を払つたものでそれ位の人が自ら遣らうと言ひ出したものですから、発起人の方でも内々食べつけない銀行事業に困難して居る場合でもあり、旁々大きに喜んで早速八木さんに引き渡したので御座りますが、其後同君が熱心事に當つて呉れたのでマア今日のやうな盛況をも見ましたやうな次第（中略）六回の増資で廿万円の銀行が三百万に膨張した訳ですから随分大した進歩と申して可からうと思ひます（後略）

< 1907年5月14日掲載 >

II 北越商会の創設—近代倉庫業の嚆矢—

江戸時代以降、大坂を起点ないし終点とする沿岸航路が発展し、諸港には商人の蔵や藩の蔵屋敷が立ち並び、廻船問屋も各港で創始されている。しかし、明治以降は、蔵屋敷の廃止等により、概して衰退を余儀なくされた。

周知のごとく、新潟湊は北前船の寄港地であり、日本海航路の有力拠点として長らく繁栄した。1869（明治2）年1月1日（旧暦では1868年11月19日）に佐渡島夷港とともに新潟港が開港したことにより、複数の蔵が残存した。先に示した外山脩造による報告には、新潟港一帯の蔵ないし倉庫について次のように叙述されている¹⁵。

【史料Ⅱ－i】

当港ハ貸庫頗ル多シ重ニ米穀ヲ預リ預リ券ヲ出シ之ヲ管守ス倉敷ハ一俵ニ付一ヶ月二厘五毛ヨリ三厘五毛位、就中鈴木長八ノ貸庫最モ多シ庫数凡ソ五十余戸アリト、又信濃川ヲ隔テタル対岸ニ沼垂町アリ全所ニ旧新発田藩ノ倉庫アリ、庫数総テ四十七因テ之ヲ新発田ノイロハ庫ト唱ヒシ由、維新ノ後全所ノ商人等之ヲ買受ケ貸庫トナシ預リ券ヲ出シ専ラ米穀ヲ預ルヲ以テ業トナス、第四銀行ニ於テ貸付金ノ抵当ニ取りタル米穀ハ大概鈴木長八ノ預リ券ト沼垂貸庫ノ預リ券ナリ

右ノ外猶追々貸庫ノ建築ヲ企ツルモノ多シト云、斯ク貸庫増加スル所以ハ、蓋シ銀行ト米商会所アルヲ以テ米穀ノ輻湊殊ニ多キニヨルナランカ

¹⁵ 前掲「銀行検査官報告書撮要」（『日本金融史資料 明治大正編 第六卷』1957年、56頁）。

なお、外山は、新潟港について、「所謂皿港ニシテ湾ヲナサス、信濃川ノ河口ハ遠浅ニシテ大船ヲ泊スルニ便ナラス、日本形ノ船ト雖モ稍々大ナルモノハ往々其出入ニ苦シムヲ以テ、大船ハ海岸ヲ距ル殆ト二三里許ニ碇泊シ、烈風ヲ避クルニハ佐州夷港ヘ赴クト云、故ニ現今ノ有様ニテハ港ト云フニ足ラス」¹⁶と信濃川河口に位置するため遠浅で大型船の停泊が難しく、悪天候時は佐渡に回避せざるを得ず、港湾としての機能を果していないと厳しく批判しているが、正鵠を得たものといえる。

こうしたなかで、近代的な倉庫業が構想されたが、これを主導したのが渋沢であったこととともに、組織形態をもって初めて創始されたのが新潟であったことは、近時見逃されているものたひへん重要な史実である。

渋沢は、摂善会の1877（明治10）年11月に開催された第5回会合で「貸倉場」の創設を提案している¹⁷。「貸倉場」とは「農商ノ望ニ応シテ其所持スル米穀ヲ預リ之ヲ管保シテ蔵敷ヲ収ムモノ」（貸倉規則第一条）で、つまりは倉庫業の立ち上げを問うたのである。

同会合には、第四国立銀行からは原田銀造と辻金五郎が参加した。

原田は「新潟県内旧新発田領沼垂ニ旧倉アリテ近時其地方ノ豪富此ヲ用ヒテ貸倉ノ法ヲ開クモノアリ、頃稍信憑ヲ取り商沾ノ間其保券ヲ流用スルニ至レリ」と新潟の現況を説明した。さらに、原田は「此ニ由リ之ヲ看レハ本案ノ如キモ亦以テ良法」と賛意を表する一方で、「惟其虞庾創立ニ至リ之ヲ銀行ニ担当スルトセハ、未タ以テ其難易ヲ計ルヘカラス」と銀行が主体となることの難しさを示した。

辻は本店と改めて協議するとしたうえで、「吾本店ハ必ス喜ンテ此議ニ従フヘシ」、「吾県官モ亦已ニ其事ニ考慮スル所アリト云」と発言し、官民共に前向きであることを示している。

渋沢にとって、これらの情報は貴重であったと考えられる。渋沢は、一定の事業基盤がある新潟で、銀行が出資や業務担当など直接関与しない形態での起業を準備していった。

渋沢は、大倉喜八郎および新潟県内の第四国立銀行の関係者を結集させて、1879（明治12）年6月に北越商会を創設した。県内からは、八木朋直、白勢成熙、鍵富三作、西脇悌二郎、権平半治、山崎利吉が参画した。

大倉喜八郎は、1837（天保8）年9月24日に蒲原郡新発田町で生まれた¹⁸。1854（安政元）年に江戸に出て麻布の鯉節店に奉公に入った。3年後の57年に下谷で乾物商の大倉屋を開店した。65年には神田和泉橋で大倉屋銃砲店を開業して、横浜のオランダ人などの外国人商人から仕入れて、幕府や諸藩、明治維新後には新政府軍に対しても幅広く販売した。

その後に貿易商への転業を志して、1872（明治5）年に欧米各国の商工業事情を視察し、翌73年に大倉組商会を設立して輸出入業務を開始した。74年にはロンドン支店を開設し、ヨーロッパ諸国をはじめとして朝鮮半島やインド、さらにはアメリカへと取引を拡大していった。

さらに、清国東三省本溪湖での石炭採掘や製鉄に加えて、土木建設（現在の大成建設のルーツ）や皮革、木材、紙・パルプ、肥料、損害保険、電力・ガスおよび製糸（1918年に新発田で大倉製糸工場を設立）など事業の規模と範囲を拡大し、「大倉財閥」を確立した。

¹⁶ 注15と同じ。

¹⁷ 同会の内容については、『伝記資料』第14巻、1957年、278～284頁に拠っている。

¹⁸ 近時刊行された東京経済大学史料委員会編『改訂版 大倉喜八郎かく語りき－進一層、責任と信用の大切さを－』（学校法人東京経済大学、2018年）は必読の文献である。

大倉は渋沢と昵懇の間柄で、有力なビジネスパートナーの一人であり、複数の企業の設立と経営にともに携わった。代表的なものとしては、札幌麦酒をはじめ、帝国ホテルや帝国劇場、北越鉄道や京釜鉄道、石狩石炭、十勝開墾、函館船渠、小樽木材、日本興業銀行等があげられる。

大倉は、渋沢の社会事業に旺盛かつ熱心に取り組む姿勢に強く共感し、1877年の東京商法会議所の立ち上げに関与した（東京商工会を経て、90年に東京商業会議所）。1900年には大倉商業学校を創設して、商業教育に尽力した（20年に高等商業学校へ昇格、現・東京経済大学）。また、長らく収集した美術品を展示する大倉集古館を1917年に開設している。

白勢成熙は、外山が言及しているように、五泉町で製糸工場、新潟で米搗所を創設・運営していた¹⁹。

鍵富三作（初代）は、1851（嘉永4）年に家業である農家の宿泊および米穀売買の斡旋をおこなう在宿を継承し、1874（明治7）年に本間新作等と持寄米売買所を立ち上げ（後の新潟米商会所）、78年には益田孝が創始した三井物産の委託を受けて清国への米の輸出をおこなった²⁰。また、岩崎弥太郎が率いる郵便汽船三菱会社に対抗するために益田を中心に1882年に創設された東京風帆船会社および渋沢や浅野総一郎が中心となった共同運輸会社の経営に関与した。合資会社新潟三業銀行（1896年設立、98年に鍵三銀行へ改称）や鍵三合資会社（回船業・倉庫業・保険代理業）などを設立している。

1880年3月に第四国立銀行の取締役役に選任され、1903年1月に監査役に転じ、08年3月に死去するまで在任した。また、北越鉄道取締役や新潟米穀取引所理事等も務めた。

新潟県会議員（1893年）や新潟市会議員・名誉職参事会員、北越興商会幹事、新潟商業会議所設立発起人・特別議員などを歴任した。

西脇悌二郎は、小千谷町の最有力者であった西脇家（本家）の当主で第四国立銀行の第2代副頭取や取締役を務めた吉郎右衛門の実子であり、慶応義塾を卒業した²¹。1877年2月から79年12月まで同行の取締役を務めた。その後、三菱会社を率いていた岩崎弥太郎の勧めを受けて、新潟物産会社を設立して社長に就任した。同社には鈴木長蔵や鈴木長八（二代）なども参画した。東京への回米や米の委託販売を手がけた。さらに、福沢諭吉の指導に従い、ロシアのウラジオストクへの新潟産品の輸出に着手した。

また、1880年に設立された横浜正金銀行の取締役役に就任している。なお、同時期に外山も取締役役に在任していた。

山崎利吉は、回船業を営むとともに、北越倉庫・新潟船船社長や新潟健康舎（後の新潟臨港、現・リンコーコーポレーション）取締役、新潟市会議長等を歴任した。また、新潟商業会議所の設立発起人の1人として名を連ね、1896年の創設時に初代副会頭となり、1905年から07年まで第2代会頭を務めている。

権平半治の足跡については不明である。本間新作や鍵富三作、白勢彦次郎等と新潟米商会所を立ち上げた権平半七（蒲原郡三本木村、現・五泉市）の関係者と思われる。

北越商会は、「農商ノ望ニ依リ米穀ヲ貸倉ニ預リ、或ハ貸付金ヲ融通ヲ為シ、或ハ物貨ヲ運搬販売スル等ノコトヲ為スヲ以テ業務トス」（設置申合規則第一条）とあるように、米などの諸産

¹⁹ 注15と同じ。

²⁰ 注11と同じ。

²¹ 西脇悌二郎については、広井一編述・発行『明治大正北越の片鱗』1934年、452～467頁、小千谷市史編修委員会編『小千谷市史 本編下巻』新潟県小千谷市、1967年、273～280頁を参照のこと。

品の保管と保管貨物を担保とする金融および流通・販売業を事業目的として掲げた。所在地は新潟港上大川前通十一番町であった（同二条）。

事業資金は1万2,000円と設定され、渋沢と大倉および八木、白勢、鍵富、西脇が各1,700円、権平が1,000円、山崎が800円を「株主」として出資した（同第四条）。

北越商会は、渋沢が標榜していた「合本主義」に基づく起業であった。また、渋沢と第四国立銀行をはじめとする新潟の企業家ないし有力者との関係の深さがみとれる。

以下に、北越商会の申合規則の主要箇所を取り上げておきたい²²。

【史料Ⅱ－ii】

当商会ノ業務ハ、国内ノ米穀ハ勿論製茶其他ノ物産ノ流通上ニ於テ、農商ノ便宜ヲ開カンコトヲ旨トシ、而シテ米穀ノ如キハ、其依頼ニ依リ之ヲ預リ、其預リ券ヲ交付シ、売買或ハ質入等ノ信票ト為サシメ、又当商会ニ於テ右米穀其他ノ抵当物ニ就キ、貸付金ノ融通ヲ量リ、且農商ノ望ニ依リ依託物ヲ引受ケ、之カ運搬販売ノコトヲ取扱ヒ、世上ノ信憑ヲ實際ニ得テ、以テ逐次殖産ノ隆盛ヲ興起センコトヲ企望シ、爰ニ営業上ノ便法ヲ商議シ規則ヲ設ル左ノ如シ
(中略)

第五条

低当（ママ）物ニ対シ貸付金額ノ原本ハ拾万円ヲ目途トシ、第一第四ノ両銀行ヨリ融通スルモノトス

(中略)

第八条

営業一般ノ事務ヲ弁理スル為左ノ職員ヲ置ク

監督 一人

支配人 第一第二 二人

(中略)

第十条

支配人ハ当商会営業ノ全体ニ注意シ、一切ノ事務ヲ所弁スルノ責ニ任スヘシ、第二支配人ハ恒ニ第一支配人ノ職掌ヲ補助シ、其疫病等ノ為メニ出頭セサル歟、或ハ他方へ出張スルコトアルトキハ其全職掌ヲ代理スヘシ

第十一条

支配人ハ新タニ一事業ヲ創始セント欲スルトキハ、其事ノ大小ニ拘ハラズ、必ス株主一同ト協議ノ上ニ非ラサレハ、其事ニ着手スルヲ許サズ

第十二条

監督ハ金銭物貨ノ出納及帳簿ノ点検等、凡ソ支配人職務上ノコトニ付其正否ヲ監査シ、詐偽不正ノコトアラハ速ニ株主ニ報道シ、相当ノ処分ヲ為スヘシ

(中略)

第十八条

当商会ノ職員タルモノハ、仮ニモ空相場類似ノ商業ヲ為スヲ厳禁トス、若シ之ヲ犯シ又ハ犯サシメ、又ハ犯シタルヲ不問ニ措クトキハ、株主商議ノ上速ニ其職ヲ解キ、且ツ其事ノ軽重ニ

²² 前掲『新潟市史 資料編5 近代I』355～358頁。

依り、犯人ハ勿論保証人マテモ償金ヲ出サシムルコトアルヘシ

(中略)

第二十条

営業年限中株主ノ間ニ於テ商業上ノ事故ヨリ、紛議ヲ生スルコトアルトキハ、双方自カラ信
 抛スル朋友ヲ差出シ、其人々ノ仲裁ニ従フヘシ、若夫レニテモ所弁セサルトキハ、其仲裁兩人
 ノ見込ヲ以テ他ヨリ又一名ヲ選任シ、其人ノ主論ニ帰着スヘシ (アウビトレーション仲裁法)

(後略)

北越商会は、新潟県に移管されていた旧新発田藩の47棟からなる沼垂蔵所(沼垂鏡が岡地内、通称「いろは蔵」)の敷地・建物を取得して事業を開始した。倉庫業と金融業を中心として、さらに寄託された米に預かり証券を発行し、これを売買するとともに質入れの信票とするなど多角的に展開された。

北越商会の事業構想ないし計画は頗る優れたものであったものの、所在地が信濃川河口から約4キロ離れているため船の使用コストが拡大するなど収益が圧迫され、業績は容易に向上せず、5年後の1884(明治17)年7月に解散することとなった。

なお、現在は、新潟市立沼垂小学校が建っている。

みるべき成果はあげられなかったものの、北越商会が新潟はもとより日本における近代的倉庫業の先駆けであるとともに、東京の渋沢および大倉と地方の企業家とのいわば「ジョイントベンチャー」の草分けであったことは高く評価すべきである。

1934年に新潟市が発行した『新潟市史 下巻』には、北越商会の先駆性について次のように叙述されている(439頁)。

【史料Ⅱ-iii】

明治十五年十一月東京深川佐賀町に倉庫会社 資本金六万五千円 均融会社 資本金二拾万円 の二会社設立せられ、預証券を流通せしむることを企てたるを以て、維新後に於ける最も完全なる倉庫会社濫觴となせども、本市の北越商会が之を先立つこと四年、規模の大小と事業の振不振の差こそあれ、正にこの種会社の先鞭を附したるは偉なりといふべく、その組織の如きも最も進歩的の合資会社たり

この倉庫会社および均融会社は、渋沢を中心に創設された。両社の実務を担ったのは、長岡出身の梅浦精一であった。景気の悪化と顧客とのトラブルのため、およそ4年で両社とも解散した。それでも渋沢は近代的倉庫業の創始を強く志向し、1897年に深川福住町の自邸内で澁澤倉庫部を匿名組合組織で立ち上げた²³。渋沢は倉庫業を「半バ公共的のモノ」と強調していたという。倉庫部は、渋沢家の独立事業を経て、1909年に澁澤倉庫株式会社となった。

一方、大阪では、1882年から日本銀行理事・大阪支店長を務めていた外山が、鴻池家や第一国立銀行大阪支店長の熊谷辰太郎、松本重太郎等の大阪の国立銀行関係者と連携して、翌83年に大阪倉庫会社を設立した²⁴。併せて、資金供給の円滑化のために大阪融通会社も立ち上げた(後

²³ 前掲『伝記資料』第14巻、295～342、349～373頁に主要な史料が載録されている。

²⁴ 大阪倉庫会社については、さしあたり、松本清『日本倉庫史』大日本出版社峯文荘、1937年、156～160頁を参照されたい。

に大阪共立銀行)。大阪倉庫会社は、現在の三井倉庫のルーツの一つである。

その後の新潟では、鈴木長八(二代)と白勢春三、小沢七三郎および近藤幸四郎が八木朋直の仲介のもとで結集し、各所有の倉庫を提供して、1887年に新潟倉庫会社を資本金5万円で立ち上げ、90年7月に本間新作が率いる新潟米商会所の倉庫も併せて業務を開始した。1894年に株式会社化している²⁵。1905年時点では、頭取が鈴木、取締役が近藤と小沢および鍵富岩三郎、監査役が白勢および栗林貞吉であった。新潟市内には、同社以外の倉庫会社として、新潟商品倉庫(上大川前通九番町および沼垂出張所/専務取締役・中山忠次郎)と北越倉庫(下大川前通五ノ町/社長・山崎利吉)が存在していた²⁶。

Ⅲ 渋沢の5回にわたる新潟県訪問・視察

(i) 1886(明治19)年

初となる1886年の訪問は、84年3月1日に設置された第一国立銀行新潟・四日市支店や富山県伏木をはじめとする北陸地方の状況の視察が目的であった。

渋沢は5月26日に東京を出発し、官営鉄道の東海道線で西に向かい、四日市および敦賀、大聖寺、金沢、伏木・高岡、富山で視察・宿泊し、「親不知子不知蝙蝠等ノ険路ヲ経」て、6月15日に糸魚川に入った。次いで直江津から柏崎(16日)、関原を経て、17日に長岡に到着した²⁷。

長岡には19日まで滞在し、第六十九国立銀行第3代頭取の三島億二郎や取締役支配人の岸宇吉等をはじめとする同行の関係者と懇談した。渋沢の日記には、長岡での宴席について、「至レハ則来会ノ者交来リテ名刺ヲ通シ」、「名妓数十来テ酒ヲ侑ム、酒間歌舞頻リナリ」とある。第六十九国立銀行の第2代頭取を務めた山田権左衛門邸に宿泊した。

18日に長岡北部の蔵王地区から信濃川の川汽船に乗船し新潟へ向かう予定であったが、荒天のため欠航となり、長岡で足止めとなった。そのため、高野徳平(米穀取引商・呉服商・醤油醸造業)や銀行関係者と再び宴席を囲んでいる。同日は唐津屋に宿泊した。

19日は早朝6時に出発したものの、「昨来暴雨ノ為メ信濃川水高く、舟行甚疾シ」とあるように、新潟まで5時間を要した。同日は、加茂の石田友蔵(加茂銀行取締役)、見附の坂田藤蔵(銀行類似会社である広融社支配人)等と面談し、鍵富三作(初代)邸に宿泊した。

翌20日には、第一国立銀行新潟支店(主任・尾高幸五郎)を視察するとともに、堀田楼で新潟県令の篠崎五郎や本間新作をはじめとする第四国立銀行の関係者等との宴席に臨んでいる。

その後の動静は不明で、6月28日に帰京していることが判明するにとどまっていたが、『新潟新聞』の6月24日付け紙面に「かねて来港中なりし第一国立銀行頭取渋沢栄一氏にはいよ〜昨朝解纜の汽船安進丸に乗込帰京の途に就かれたり」とあり、23日朝まで新潟に滞在していたことが明らかとなった。なお、安進丸は新潟・長岡間の川汽船である。

(ii) 1901(明治34)年

2回目の1901年の訪問は、北越鉄道の社債募集が主な目的であった。

渋沢は4月25日に東京を出発し、長野を経て、26日には日本石油柏崎製油所と浅野総一郎が

²⁵ 前掲『伝記資料』第14巻、293～294頁。

²⁶ 商業興信所編刊『日本全国諸会社役員録 第十三回』1905年、上編515、523頁。

²⁷ 1886年の訪問・視察については、『伝記資料』第29巻、1960年の440～444頁に拠る。

経営する北越石油部柏崎製油所を視察した後に長岡に入った²⁸。

同日には、常盤楼で六十九銀行第4代頭取（1891年就任）の岸宇吉や第一銀行新潟支店支配人の松井吉太郎および長岡銀行（1896年設立）等の関係者との会合で経済問題および北越鉄道について演説した。その主要箇所は以下のとおりである。その後の宴会に参加した後に若松亭に宿泊した。若松亭では韓国の林公使および尾高次郎への書状を認め、第一銀行取締役支配人の佐々木勇之助へ送った。また、尾高幸五郎へも手紙を書き送った。

27日には第一銀行長岡出張所に赴き、業務を点検した後に主任（所長にあたる）の佐田左一をはじめ従業員に訓示した。同出張所は、1900（明治33）年9月1日に開設されている。

また、北越鉄道本社でも職員へ訓示をおこない、専務取締役の渡辺嘉一、取締役の久須美秀三郎や前島密および課長クラスの幹部職員と意見交換した。

同日には、三島郡塚山村の有力者である長谷川家の関係者から「赤穂四十七士ノ書翰遺墨ヲ示サ」れ、これらに対して「蓋シ此墨跡ハ中沢雪城ノ集ムル所」とみている²⁹。

また、改めて新潟県内の銀行関係者に対して社債募集への協力を要請し、「一同其意ヲ領シ勉メテ之ニ応」じた。

なお、佐々木から韓国借款に関する書状が届き、それへの見解を電報で送っている。

28日には再び北越鉄道本社に出向き、役職員に対して綿密な経営指導を施した。渋沢と第一国立銀行から指導を受けた六十九銀行副支配人の小畔亀太郎および新潟から鍵富三作と白勢春三等の来訪を受けて長岡を出発し、三条では旧知の笠原文治郎（北越鉄道監査役等を歴任）と面会した後に新潟へ到着した。当時の沼垂駅では浜政弘などの出迎えを受けた。浜は岩崎弥太郎の従弟で、日本郵船新潟支店長や新潟株式取引所社長、新潟銀行・北越鉄道の取締役、新潟商業会議所特別議員等を務めた。

行形亭で新潟商業会議所が主催する招待会が開催され、約60名が参加した³⁰。渋沢は、経済問題および北越鉄道について演説した。その主要箇所は次のとおりである³¹。

【史料Ⅲ－i】

（前略）

私は北越鉄道の事の関係有つて此度び御当地へ罷り出たのでありますが、私は御当地此他の地方の方々から色々御相談に与かりまして、私に世話をせよといふ御依頼を蒙つたこともございましたが、それこれの中で追々抄取つて此北越鉄道が出来たのでありますが、元來会社が成り立ちましたも事業も段々進んで参りましたが、扱て其の経営施設が誤つて實に今日は甚だ困難の場合になつて居るのでありますが不肖なから私も監査役の職に居つて、時々此牛耳を執ります所の取締役会にも列して私の意見を申し述べ置きましたが、扱てどうも思ふやうに進みませぬです

（中略）

²⁸ 1901年の訪問・視察については、『伝記資料』第29巻の469～475頁に拠っている。

²⁹ この長谷川家の関係者は、長谷川弥五八であると考えられる。弥五八は塚山村域の最有力者である長谷川越夫家の分家筋にあたり、同家を差配し、塚山信用組合初代理事長を務めるとともに、渋沢の思想・理念に基づき商工業者の啓発を促進する団体である竜門社（1886年創設、現在の渋沢栄一記念財団のルーツ）の通常会員でもあった（竜門社発行『竜門社会員名簿』1917年11月、明治大学附属中央図書館所蔵）。

³⁰ 『新潟新聞』1901年4月30日付。

³¹ 前掲『伝記資料』第29巻、483～484頁。

併し此鉄道が御当地と密接の関係を有つて居りながら未だ万代橋まで線路が来ないといふことは、どうも遺憾とは思ひながら今日まで出来なかつたといふことは、宜しく諸君に於ても御宥恕を願ひたいです、決して新潟市を粗略にするといふのでは無い、望んで能はぬことであります、今の社債に依つては先の社債を償ふことが出来ますし、渡辺君（渡辺嘉一北越鉄道専務取締役：引用者）もこゝに御出席になつて居られますが、前後の経営に就いても事業上に甚だ完備を欠いたところもあつたに相違無いと思ふのであります、如何せん一方には会社の経営が誤つてあつて金が足らぬで、漸くそれを埋めて連絡を付けた、連絡を付けたが、一方に又差支へが出来たのである、斯ういふ風に種々の差支不都合等は免かれぬのであります、実に困難の位地に居るところの鉄道ではあるが、併し此鉄道は矢張り不十分ながらも交通運輸を謀ることの出来る時機には達して居るから、若し之れ微かつせば貴国の中央に対する連絡は十分に出来ないと申し上げても宜しい、そうすると此鉄道に就いても其の効能を幾らか唱へて貰ひたい（中略）

第一銀行の支店、北越鉄道の関係、又従前からの御懇親、此三つの因縁を以て、今後も尚相変りませず御懇命を願ひたいです

その後宴席に参加し、篠田喜四郎邸に宿泊した。なお、同日には第一銀行本店からの電報および佐々木からの書状を受けている。

改めて指摘しておくが、渋沢の働きかけおよび関係者の奔走が奏功し、北越鉄道は300万円の社債発行により資金調達を実現して、1904（明治37）年5月に沼垂から万代橋駅（旧・新潟駅）までの延伸を果たしたのである。

29日には渡辺や浜および鍵富等と万代橋駅の建設予定地を巡視した後、新潟商業会議所会頭の鈴木長蔵や副会頭の山崎利吉等と面会し、第一銀行新潟支店で業務をチェックするとともに日和山を巡った後に浜邸に宿泊している。浜邸での宴会の席上、渋沢は、会長を務めていた岩越鉄道の会津若松から新潟県内への延伸を経済状況が好転したら直ちに着手したいと発言した³²。

30日には再び第一銀行新潟支店にて職員への訓示をおこなった後に白山公園など市内を廻った。午後から新潟市立商業学校（現・新潟県立新潟商業高等学校）に赴いて同校の生徒に対して演説した。

このなかで、渋沢は「相当なる学問に依つた商業でなければ、此末は決して第一国の商務を処理して往くことが出来ぬのみならず、一歩進んで海外の対等の商業をなし往くことが出来ぬ」、「新潟市は力を入れて吾々に大なる費用を懸けて商業教育を与へて呉れるのである、其の精神には十分酬はねばならぬ」と商業教育の必要性に言及したうえで、「此処に卒業したものは飽くまでも熱心に其の事業に従事し且つ志しを強く高く有つやうにして欲しい」、「師恩に対しては常にこれを忘却せざらんやう」³³と述べ、高い志と学恩の重要性を強調した。

同日夜は鍋茶屋にて新潟県幹部と各銀行の取引先関係者約30名を招待した宴席をもった。岩越鉄道専務取締役の前田青莎と面会している。

翌5月1日6時に新潟を出発し、新発田と水原町を経て東蒲原郡津川町に至り、古河市兵衛が開発した草倉鉱山の関係者と面会した後、同町の有力者である平田次八郎邸で宿泊した。平田は第三十一国立銀行の経営に参画し、岩越鉄道へ出資している。

³² 『新潟新聞』1901年5月1日付。

³³ 『伝記資料』第26巻、1959年、786～793頁。

2日以降、福島県坂下町、若松（東山温泉新滝で宿泊）および郡山（永戸直之助邸で宿泊）を経て、5月4日に帰京した。

(iii) 1905 (明治 38) 年

3回目の1905年の訪問は、第一銀行新潟支店および長岡出張所の六十九銀行への譲渡に伴うものであった。

新潟支店等譲渡の提案は、1905年2月頃に渋沢から岸と小畔へ打診されたとみられる。岸は両行間の資金量の格差と資金需要期の対応力から支店および出張所の閉鎖に難色を示したものの、渋沢が熱心に説得し、さらに岸が求めた責任者である新潟支店長の松井吉太郎および長岡出張所主任の佐田左一の移籍を渋沢が認めたため、岸は最終的に受託した。

同年5月20日の第一銀行の臨時株主総会で新潟支店および長岡出張所を6月20日に廃止することを議決した³⁴。6月1日に六十九銀行新潟支店が上大川前通八番町に新設されている。松井は同行の専務取締役、佐田は新潟支店支配人に転じた。

渋沢は7月9日に出発し、長野を経て、10日に新潟に到着した³⁵。六十九銀行の関係者へ訓示をなした後に鍋茶屋での宴席に臨み、経済に関する演説をおこない、会津屋に泊まった。

11日は行形亭で六十九銀行とともに祝宴を開催し、60名以上が参加した³⁶。渋沢は、第一銀行の閉店と六十九銀行の開店に謝意を表するとともに、将来の銀行の取るべき方針について詳細に演説している。新潟には13日まで滞在し、12日には県知事の阿部浩や県幹部、鍵富三作や岩三郎などと鍋茶屋にて懇談した。

続いて長岡に13日から16日まで滞在し、北越鉄道や六十九銀行の関係者へ訓示するとともに、長岡商業会議所で経済に関する演説をおこない、会議所の重要性を強調した。「聴衆頗ル多シ」とある。長岡館での宴席に臨み、日本石油社長の内藤久寛等と会談した。16日夜に帰京した。

この間、6月30日に渋沢は松井に書簡を送り、「第一銀行より貴兄ニ対スル御待遇之事ハ不充分から永年之御勤勞ニ酬ゆる」、「いつ迄も親密之関係相存し候様企望之至」³⁷と述べ、これまでの功績への謝辞とともに両行の関係の緊密化を要請した。

(iv) 1910 (明治 43) 年

4回目の1910年の訪問は、女子教育の啓蒙および日本女子大学校（現・日本女子大学）の寄付金募集が目的で、同校校長の成瀬仁蔵と同校評議員で森村組創設者の森村市左衛門等が同行した。

渋沢は8月4日に出発し、翌5日に柏崎で講演および内藤久寛や牧口義矩等へ寄付を依頼した³⁸。6日には柏崎小学校で女子教育について講演している。

6日夕方に長岡に到着し、六十九銀行の役職員に訓示をおこない、長岡館での歓迎会で経済について演説した。翌7日に長岡座で女子教育についての講演をおこなった。渋沢は「女子教育を今日の程度に止め置くは国家未来の為め頗る憂慮に堪ない、何卒女子にも大学程度の教育を修め

³⁴ 『伝記資料』第4巻、1955年、635～636頁。

³⁵ 1905年の訪問・視察については、前掲『伝記資料』第29巻の505～506頁に拠っている。

³⁶ 『新潟新聞』1905年7月13日付。

³⁷ 『伝記資料』第56巻、1964年、691頁。

³⁸ 1910年の訪問・視察については、『伝記資料』第44巻、1962年、571～581頁に拠っている。

しめたい（中略）成るべく多数に此教育を及ぼしたい」と女子教育の意義と必要性およびさらなるレベルアップの重要性を強く訴えた。聴衆は一千人余と盛況であった。

8日には、石田友蔵の求めを受けて、新潟県立加茂農林学校（現・加茂農林高等学校）で経済に関する講演をおこなっている。

同日に新潟に到着し、行形亭での歓迎会で経済について演説した。参加者は100余名であった。翌9日には新潟県師範学校で女子教育についての講演をおこなうとともに、鍵富三作（二代）、斎藤喜十郎（二代）、白勢春三、桜井市作等に対して寄付を熱心に要請した。同日昼に鍵富が主催した行形亭での午餐会に参加し、夕方の鍋茶屋での歓迎会では公債証書の近状について演説した。

8月10日に新潟を出発し、三条の三条小学校、新津の菓城寺で女子教育について講演をおこなった。翌11日には高田に到着し、大漁座で商業道徳について、上越倶楽部での歓迎会では女子教育および日本女子大学の教育内容について講演している。

その後、長野と上諏訪で講演し、8月16日に帰京した。

渋沢等の講演活動について、日本女子大学が1942年に刊行した『日本女子大学四拾年史』は以下のように叙述している（161～163頁）。

【史料Ⅲ－ii】

（前略）

一本の大根より百万の毛細根、これが女子大学の力を伸ばし、女子高等教育を発展せしめる要素であつた。此の将来の根を養ふ一つの方法としてとられたのが、明治四十三年八月の北越地方講演行脚であつた。

（中略）

新潟は成瀬先生ゆかりの地であるが、女子教育の反動的空気は最も強く、学校当局者自身が女学校以上の希望者なきを公然と喜ぶ有様で、地方有力者の女子高等教育に対する理解も深くはなく、むしろ実業家としての渋沢・森村両氏が、かく迄女子高等教育の普及に力をつくされる理由を解しかねるといふ有様であつた。然し此の地方は若干の卒業生は既にあるとは言へ、謂はば処女地で、今回の行脚は啓蒙の意味に於て意義があつた。

（v）1917（大正6）年

5回目の1917年は、会頭を務めていた東北振興会（1913年創設）の東北6県視察の一環であった。

渋沢は10月6日に出発し、同日中に長岡に到着して川上佐太郎（二代）邸に宿泊した³⁹。翌7日に六十九銀行の本店新築落成式に出席した。同式で、渋沢は、「殊に第一銀行と六十九銀行とは、兄弟親子の間柄を以て四十年を経過」、「段々と堅実に、且つ隆昌に進み」とこれまでの発展を称え、「当行をして今日の盛大にせしめたものは、社会である、即ち銀行の御得意先であると云ふことを忘れてはならぬ」、「銀行と云ふものは決して自分の力で許り盛大になるものではない、其地方々々の進歩に伴つて発達する」と述べるとともに、銀行を地方の富を写す鏡と例えて「鏡の曇を磨くものは、重役・行員の配慮に依らねばならぬ」とその役割を説き、「一時の幻影に浮か

³⁹ 1917年の訪問・視察については、『伝記資料』第56巻、1964年、197～198、200～203頁および第57巻、1964年、628～630頁に拠っている。

れて自己の本務を忘れないやうに希望致します」⁴⁰と結んだ。また、長岡商業会議所や長岡市教育会・長岡実業組合連合会・長岡実業協会および修養団長岡支部が主催した講演会が開催され、渋沢に随行した第一銀行監査役の尾高次郎の実業に関する講演等のあとに、渋沢は「富の増進と商業道徳」と題して講演した。参加者は千数百名に達した。

8日には長岡鉄道および越後鉄道に乘車して弥彦神社および大河津分水の建設工事を視察した後には新潟に到着した。同日に新潟商業会議所（市内銀行団商話会）、翌9日には新潟県物産陳列場等で講演をおこなった。8日の講演の主要箇所は次のとおりである⁴¹。

【史料Ⅲ－Ⅲ】

（前略）

今回を加算すれば、五回になりますが、其の都度越後の文化が進展して居るに驚かされる次第であります。今日一日の旅行に於ても愉快な新しい道をとつて長岡鉄道から大河津の分水を見物し、越後鉄道によつて弥彦を経て御当地に着きました。此の新しい二線と云ひ、大河津の分水と云ひ、総て新しく実行された文明の施設でございます。

（中略）

殊に越後鉄道が新に公園の施設を為して参詣者に慰安を与へんとされる事は如何にも当を得た経営と肯かれました。

（中略）

新潟は水によりて成立すると謂はれて居る程水に因縁の深い都市であり、水は此都市の生命を扼して居るので、新潟の今日あるのは殊に水の恩恵と云はねばならぬ、併して一面水が此頃の様に汎濫して災危を与ふる事もある

（中略）

水は此に対する方策により善用も出来又害悪も流すものであります。そこに人為的努力を必要とする訳であります。大河津分水成功の暁には水害が除去され、市民は再び水なる哉水なる哉と其の徳を頌するに至るであらうと思ひます。

渋沢は、10日に蒸気船で荻川へ向かい、信越線および磐越西線で新津・山都を経て、会津若松へ赴いた。最終的な帰京は10月23日であった。

結びにかえて

渋沢栄一は、全国各地の産業発展に直接的に関与するとともに、各地において渋沢のスタンスを真摯に受け入れて近代ビジネスの立ち上げを着実に実行し、高潔な人格とともに責任感と倫理観に富んだ各地域の企業家に注目して、物心両面から協力した。渋沢の多面的な関与とともに、キーパーソンとしての「地域の渋沢」というべき企業家が各地の経済近代化と成長を主導したのである。両者の緊密かつ長期的な関係が重要であった。さらに、近代ビジネスの仕組みを全国に伝播させる意味でも、渋沢は大きく貢献したのである。

新潟地域においては、渋沢と本間新作および鈴木長蔵、さらに鍵富三作や白勢春三との関係が金融をはじめとする諸産業の生成と発展の大きな基盤となったのである。また、両者間を取り持つ

⁴⁰ 『伝記資料』第50巻、1963年、366～367頁。

⁴¹ 前掲『伝記資料』第56巻、200～201頁。

た松井吉太郎の存在も不可欠であったことも指摘する必要があるだろう。

今後も引き続いて、キーパーソンとしての彼らの事績と各企業ないし事業の実態および渋沢との関係を立ち入って考察していきたい。

【付記】

筆者は、2016年度から3年間「日本経済史」を担当する機会を得た。これにあたり、澤口晋一先生、越智敏夫先生、安藤潤先生および平山征夫先生には御厚誼を頂いている。各先生に加えて、学務課および情報センター図書館、総務課の職員の皆様にも御礼申し上げる次第である。

本稿を執筆中に、筆者の伯父である井上純一が死去した。50年近くにおよぶ厚情に対して感謝すべく、本稿を霊前に捧げることをお許し頂きたい。